
インフィニットストラトス invisibility menaces 見えざる脅威

jun

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニティストラトス invisibility
menaces 見えざる脅威

【Nコード】

N4188Y

【作者名】

jun

【あらすじ】

篠ノ乃博士が開発したISによって世界のパワーバランスは大きく崩れ、女尊男卑が社会の風潮となってしまった。しかし、織斑千冬の弟一夏はなぜかISを動かしてしまい、学園に入学することになった。しかし、また別の男がISを動かしてしまい!?

プロローグ（前書き）

何分初心者なのでご容赦ください。でも精一杯書かせていただきます！！

プロローグ

「はあっはあっしっこいなあもう!~!」

少年は地上500メートルを飛行していた。

そう、ISで。

.....
.....
.....

SIDE 一夏

(なんでこうなった・・・)

その頃、織斑一夏は学校生活初日のHRの真っ最中だった。

その日の放課後、一夏は幼馴染の篠ノ乃箒と共に稽古をしていた。
もちろん一夏のボロ負けで。

その砂塵の中から一つの影が見えた。

15分前

「くそっ、どこかに建物は!？」

謎のISの集団に追われた少年はもう何時間も飛行をしていた。

「このガキイ!!いい加減にあきらめろっの!!!!!!」

「いやだつての!!ん?あれは…」

少年は一つの巨大な建物を発見した。

「しめたっ。IS学園だ!!よし、これで助かる!!」

少年は一気に急降下し、学園に張り巡らされたシールドにとりついた。

「後はこのシールドを…」

「おちろオオーーーーー!!!!!!」

「やっべっつっ!!」

女の振りかざした一撃は少年のISの右肩を打ち抜き、そのままシールドを破壊した。

後ピットにある非常ボタンを押して！すぐに先生達がくるわ！！」

「え、そんな簡単に信じちまってるのか？」

「アンタねえ、ISのコアナンバーを教えるのは、自分の個人情報をすべて教えてるの同じなの！！そんなことまでして、援護を頼むなんて、よほどの事態よ！」

「そ、そうか・・・」

「分かったなら早く行きなさい！こっちも出撃するわ！！」

「わかった！」

一夏はピットの非常ボタンを押して、損傷しているISに近づいた。

「援護感謝する。こちらの機体は中破されている。とにかく時間を稼いでくれ！」

「ああ。って、まさか男？」

「そんなことは今はどうでもいい！！」

「わ、わりい。でも時間稼ぎってたってどうすりゃいいんだ？」

「あそこのISと同じように、牽制攻撃を続けてくれればいい。」

ふと向こう側を見ると鈴が複数のISを同時に相手をしていた。

「助けるとは言ったものの、くそっこいつらしつこい!!」

するとバイザーをしたISから下品な声が聞こえてきた。

「邪魔すんじゃないよこのアマアアアアアア!!」

鈴のISに攻撃が加えられようとしたとき、

「鈴——————!!」

ガッキイイイイイイイイイイン!!

一夏の白式が鈴と敵の間に割り込んできた。

「鈴!!大丈夫か!??」

「何ぐずぐずしてたのよ!?あぶなかったじゃない!!」

「ごめん・・・」

すると、後方から打鉄やラファール・リヴァイブに乗った教員達が続々と来た。

「やった!!先生たちが来たのよ!!」

「た、助かった・・・」

「あれが学園のISか・・・すごい数だな・・・」

三人が安堵の息を漏らしていると、一機のISがスタングレネードを投擲した。

ズバアアアアアン!!!!!!

「さすがに数が違う。ここはひとまず撤退するぞ!」

そういつて三機の謎のISはシールドを容易に破壊してあっという間に飛び去った。

「とりあえず一安心か・・・」

そういつて少年はISを強制解除し、意識を手放し、その場に倒れこんだ。

プロローグ（後書き）

一応週一ペースで書かせて頂きます。アドバイスや不具合がありましたらじゃんじゃんコメントください！！

第一話 転入決定（前書き）

あんまり慣れてないので短文になりがちかもしれませんがご容赦ください・・・

第一話 転入決定

その少年はベッドの上で目覚めた。

「う・・・うん？」

そこはいかにも医務室という感じで、自分が怪我人ということを感じさせられた。

「ここはどこだ？ 確かIS学園のアリーナで気絶して・・・そうなるここは学園のどこかか？」

プシュッ

するとタイミングを見計らった様に医務室の近未来的なドアが開き、二人の女性が入ってきた。

「目が覚めたようだな。安心しろ、私はここの教師の織斑千冬だ。こっちは同僚の山田先生だ。」

織斑千冬という女性は、隣の服と体はアンバランスな小柄の女性を紹介した。

「初めまして、山田真耶です。よろしくお願いしますね。」

「さて、こちらの自己紹介も済んだので、そちらのことも教えて貰

おうか。」

少年は一息ついてこういった。

「えっと、俺の名前は井上太智です。生年月日は2月14日、年齢は15です。一応所属は日本政府内閣直属特務IS研究機関京都支部。」

「The Government Cabinet Immediate Special Is Research Facilities Kyoto」
通称TISK（タスク）の実験協力者です。」

「その年齢でなぜそのような研究機関にいたのだ？」

「俺の両親はそこの所長と副所長でした。ですから手伝いみたいな感じで、実験に参加していました。」

「実験とは？」

その時、太智が衝撃的な一言を言った。

「決まっているでしょう？男がISに乗るための実験です。」

「つつつ！！」

「詳しく言うと、脳内のホルモン分泌率や、それ自体を入れ替えた
り、はたまた遺伝子構造と染色体を弄くり回す様なことです。まあ
大っぴらに言えるようなことではないとわかってますよ。おまけに
過度のストレスや薬品の副作用なんかで自慢の黒髪は銀髪に、茶色
かった瞳はグレー、立派な黄色人種な肌色は真っ白のもやしヤロー
になっちゃって。それに俺の体は、遺伝子的に約41.653%が
女性の体なんです。性行為をしても子供が出来る確率なんて10万
分の1以下ですよ。全く、何ラウンドすればいいんだつつーの。」
なおも千冬は続けた。

「なぜそのような実験に参加した？」

「自衛のためです。」

「自衛？」

「さっきも言ったタスクというのは公式的ではないですが、日本、
いや世界でも5本の指に入る研究機関でしょ。そこの所長と副所
長の息子であれば、大概の人間は人質にとって技術を盗もうとする
はずですよ。ですからいつ何時襲われるかわからないので、自衛のた
めにISにのる実験をしていたのです。まあ理由はそれだけではな
いんですけどね。」

「ほかの理由とは？」

「この女尊男卑の世界を変え、元の何の差別もない社会に戻すためです。俺らタスクはそのために日夜研究をしていました。ですが・
」

「ん？」

「ですがある日、変な奴らに襲われてしまい、おれらタスクの施設は壊滅、そのまま組織もバラバラになり、世界中に散らばって今も研究を細々と続けていますよ。」

「その話、もう少し詳しく聞かせてくれないか？」

「ええ、初めに襲われたのは俺の中学の卒業式の日でした。式が終わって、皆で写真を撮り合ったり、この後の打ち上げについて騒いでいた中、いきなり俺の父が撃たれました。犯人は誰かわかりません。恐らく狙撃されたんだと思います。撃たれた後、母が俺と一緒に車に乗って施設まで行きました。車を降りた瞬間車が爆発して、母は俺を爆風からかばって死に、そのあとは研究員の人に連れられていきついた先は、極秘裏に開発された俺のISだったんです。死にも狂いで俺はISに乗り込みました。その間に何人も研究員の人を殺され、俺はそれをぐっと堪えながら機体を起動させるのに集中しました。やっとのことで起動した瞬間、俺は天井にいくつも穴をあけてフラつきながら上空へ飛びました。見てみると施設は無惨にも跡形もなく破壊され尽くし、大量の死体が転がっていました。そのあとは1ヶ月半ほどこそ逃げ回って今に至るわけです。」

そのような事件があっただにもかかわらず、大きなニュースにならない

かったのは、大方、その研究機関の研究内容を知られないためだったのだろう。千冬はそう理解した。

「以上が俺の経歴です。それで、俺の処分はいつたいどうなるのですか？織斑さん？」

その瞬間・・・

バキッ！！

太智の頭がいきなり殴られた。

「なにすんですか!？」

「「織斑先生」だ。馬鹿者。生徒がそんな生意気な口をきくな。」

「へ・・・?」「生徒」?どういうことです?」

「どうもこうもあるか。こんな危険人物、放っておくわけにもいかんだろう。それにお前がその辺を飛び回っていたら一般市民が巻き添えをくらう恐れがある。後、お前はまだ15だろう?私たち教師が教育する必要がある。素人にISを乗られてはたまらんからな。」

それを聞いて太智は、新しいおもちゃをもらった子供のような笑顔を見せた。

「ありがとうございます!!!」

するといつの間にか電話を手に持っていた山田がこう言った。

「・・・はい。はい、わかりました。では早速井上君。あなたのクラスは2組になりました。今日のところはここでしっかりと傷を癒してください。調べてみたら体中傷だらけでしたからね。」

「それと井上、これを。お前が身に着けていた待機状態のISだ。」

そう言つて千冬が差し出したのは、シルバーのネックレスだった。つり下がっているシルバープレートには、

C L E A V E

と刻まれていた。

「お前のISはC R E A V E（クリーヴ）と言つのだな。日本語で「切り開く」。いい名前じゃないか。」

「はい。」

「では明日からお前はここの生徒だ。早朝にまた起こしに行くから、それまではゆっくり休んでろ。」

そうして千冬は山田とともに部屋を後にした。

第一話 転入決定（後書き）

次回は第二話と登場人物紹介を書きたいと思います。

第二話 転校生はもやしっ子（前書き）

一応オリキャラは二組に入れて鈴との絡みを増やそうかと思っています。

原作での扱いが・・・

第二話 転校生はもやしっ子

キーンコーンカーンコーン

近未来的な校舎に不釣り合いなチャイムが鳴り響く中、一年二組のHRが始まる。

「早く席についてください。あ、それと今日は転校生を紹介します。」

「ええー！ー！ー！ー！！？？？」

「だれだれ？」

「どんな子だろう？」

皆それぞれ感嘆の声を上げる中、鈴は昨日のことを思い出していた。

(結局、あのISに乗ったのは誰だったんだろう？顔まで隠れたISだなんて珍しいわね。でも声が完全に男のこえだったし。戦闘が終わってからいきなり倒れて先生たちに運ばれて行って全然近づけなかったし・・・あゝもうっ！イライラするわね！というか、転校生って昨日の奴かしら？)

「井上。わかるとは思いが自分の身分はあまり詳しくは語るなよ。もちろん、研究所のことも喋るな。」

「分かってますよ、織斑先生。でも、いつかは言わなきゃならない人も現れます。その時は・・・いいですよね？」

「ああ、その時は存分に自分を語れ。」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

というやり取りがあった。

「え〜と、井上太智です。生年月日は2月14日、血液型はA。趣味はウインドウショッピングとか、おしゃべりとか、後映画鑑賞とかにも最近ハマってます。この髪の色と瞳のせいで外国人とかハーフとかと間違われますが、純粋な日本人です。あ、ちなみに京都出身です。それと左利きです。はい。と、とりあえずよろしくお願ひしますっ!」

(どうだ!?俺の一世一代の全力の自己紹介!)

シーーーーーーン・・・

(ちくしょうっ、この数秒間の沈黙が何分にも何時間にも感じられる。くっ、なんかしくじったか!?)

「キャ・・・」

「んお？」

「キャー――――ツツツ――！！！！」

その瞬間、雲を貫くような声がクラス中に響いた。

「すごい！！うちにも転校生が来るなんて！！」

「美形！それでいて少し草食系男子！」

「お持ち帰りしたい！！」

「左利きだつて、すごい！超レアだよねっ！しかも京都出身！！」

「男の子なのにウインドウショッピングが好きだなんて、なんかオシャレじゃない！？素敵！！制服のアレンジもなんかカッコいいしっ！！」

「おお・・・何か知らんが成功したっぽいな・・・よし、高校デビューは無事に出来たな。」

太智がホッと胸を撫で下ろしている間に一組の方では・・・

.....

「何か二組の方が騒がしいですね。」

「うるさいな・・・もう少し静かに出来んのか隣のやつらは」

「席替えでもしてんのか？」

などとぼやいていると、

「そこっ！！私語を慎めっ！！」

バシンバシンバシンッ！！！！

見事出席簿の3連コンボが決まった。

「うう、痛いですわ・・・」

「ぐぐぐぐ」

「千冬姉・・・ちょっとは手加減しろよ・・・」

「織斑先生だ。」

バシンッ！！

「全く、隣のクラスがうるさいくらいでいちいち喋るな!!」

「すみません・・・」

因みに一夏は今日で出席簿アタックは3回目である。

.....

視点は戻って二組に。

「それじゃあホームルームはここまで。各自次の授業の準備を
して頂戴。」

担任がそういって教室から出た瞬間・・・

「ねえねえ、井上君はウインドウショッピングが好きって言った
けど、どこのブランドが好き？」

案の定女子たちが一斉に質問攻めにきた。

(やっぱり来たか・・・)

「ええっと、いつも行くのはライオンとかで、はっきりこれとい
って好きなブランドはなくて、気に入ったお店ならどこだって好き
だよ。」

「へえ〜、型にはまらない感じなんだね。」

「まあね・・・あはは・・・」

「型にはまらない自由なペースが好き・・・と。」

（なんか向こうでメモってるし・・・）

「じゃあさじゃあさ、今度皆で買い物に行かない？井上君の私服も見たいし。あ、そうだ。井上君はどんなスタイルが好きなの？」

「そうだねえ、俺は結構ナチュラル系とか、清楚系にゆるい感じの服も好きだな。」

「ナチュラルに、清楚に、ゆるふわ系・・・」

（またメモってる・・・）

「あ、でもあんまり大人数は嫌だな。せめて3、4人ぐらいじゃないと・・・」

「あ、結構少数派なんだあ。でもそれっぽいねえ。ひよつとして、静かなところが好き？」

「うん。景色がきれいで静かな場所は大好きだよ。」

「じゃあ湖とか、そういうところにも行く計画もしとかなきゃだねっ
！」

「そうだね、あはは・・・」

キンコーンカーンコーン

慣れない愛想笑いをしているとまた不釣り合いなチャイムが鳴った。

「あ〜ん、もっとお話したかったのに〜。」

「じゃあ井上君、また後でね〜」

「う、うん。また。」

ぞろぞろとクモの子を散らすようにして女子たちが席に着く。

(助かった・・・あ、名前聞くの忘れてた。)

.....

「で、あるからして。」

授業中に太智はふと、鈴の方を見た。

(あの子、確か学園に逃げてきた時に援護してくれた子だったよな。確か、鳳鈴音とかいう・・・後で話しかけてみよう。)

「・・・君！井上君！！」

「は、はい！」

「ちょっと、聞いてた？問の12番、答えは？」

「ええっと、イです。」

「はい正解。なんだ、ちゃんと聞いてたのね、それならいいんだけど。」

「すごい。即答だよ、即答。」

(ああ、ビビった・・・)

なぜ太智が即答できたかというところ、太智は研究所での実験のために毎日ISについて勉強をしていたからだ。その学力は男子といえど学園の生徒となんら遜色ないだろう。一組の生徒は例外として。

「ヘックシヨイ！！・・・誰か噂してんのか？なんちゃって。」

「織斑！！！」

「はいい！すいません！！！」

「クスクス・・・クスクス・・・」

(うう、死ぬほど恥ずかしい。)

そんなこんなで午前中の授業は過ぎて行った。

第二話 転校生はもやしっ子（後書き）

太智の服装はザフト軍の白服をイメージしています。
後オリキャラの紹介も同時にアップします。

オリキャラ紹介(前書き)

やっとキャラのイメージが固まりました・・・
因みに声的には神谷浩史をイメージしてます。

オリキャラ紹介

井上 太智^{たいち}

生年月日 2月14日

血液型 A型

身長 168.5cm

体重 51.2kg

瞳の色 グレー 髪の色 銀髪でほんの少しくせ毛

趣味

一人で読書をする事 オシャレ ウインドウショッピング 軽い運動

所属 日本政府内閣直属特務IS研究機関京都支部

The Government Cabinet
Immediate Facilities
Kyoto

通称^{タスケ} TISK

研究所の所長と副所長の一人息子で、中学の卒業式の日に関親を

正体不明の組織に殺される。また、同一の組織に追われ続け、やつとの思いでIS学園にたどり着いた。織斑千冬のはからいで二組の生徒になった。度重なる実験と薬物投与により髪と瞳が変色して銀髪とグレーになった。さらに肌も白くなったので中学の同級生からは「ヘタレもやし」と呼ばれていた。ISの操縦に関しては、回避運動だけは得意らしく、本人も自信があるらしい。また、料理に関しては極々人並みにでき、味の評価から「ミスター普通」と揶揄されたことも。本人はかなり気にしている。ファッションセンスは定評があるらしく、中学時代は友達によく服の買い物には付き合わされたらしい。人気の某ファッション雑誌も定期購読している。制服は上着を長いトレンチコート風に改造し、ブーツは黒色を使用している。因みに得意科目は数学。

オリキャラ紹介（後書き）

次回は少し更新が遅くなるかもしれませんが。
なるべく短文にならないよう頑張ります！！

第三話 挑戦状（前書き）

今回は頑張って文を長くしました！！
今後も徐々に量を増やしていきたいと思えます。

第三話 挑戦状

太智が転校してきた日の昼休みの二組にて

「ねえ、確か鳳さんだったよね？ちょっと話をしない？」

太智は女子の群れをかき分けながら鈴に話しかけた。

「ん。別にいいわよ。でもこれから一夏のところ、いや一組に行くから。そうだ、アンタも来る？ちよつどいい機会だから皆に紹介するわよ。」

「ほんと？じゃあそうするよ。」

太智は鈴の後について歩き出した。

「あー！ー！ーっ！鳳さんが井上君をつれてった！」

「え？どつう関係なの？」

「いや、別になんでもないから・・・ごめん皆、また今度一緒にお昼をたべよう。」

「まあ井上君がそつうなら仕方ないか。またね。」

こつうして太智は鈴とともに二組を出た。

「やつほー、一夏。これからいつしよにお昼食べない？」

「よう鈴、ちょうどいいタイミングに来たな。俺たちもこれから食堂に行こうと思ってたんだ。ん？後ろにいるのは誰だ？」

「それは食堂に着いてから話すわ。さ、行きましょ。」

「おう、おーい篤、セシリア、学食行こうぜ。」

「ああ。ていうか、私たちが最初にさそったんだろう！」

「そうですねー夏さん！わたくしたちが最初にさそった直後に鈴さんたちが来たのですわ！」

「悪い悪い。まあそんな細かいことは気にすんなよ。さ、行こうぜ。」

「むづ。」

「不服ですわ・・・」

.....

学食にて

「さて、みんな気になってるとは思っけど、今日うちのクラスに転校してきた井上太智よ。さ、あんたも自分で自己紹介なさい。」

「うん。えっと井上太智です。呼び方は自由にどうぞ。生年月日は.....」

「以上です。」

「長い。」

鈴がブツサリと太智の自己紹介を全否定した。

「し、ごめん・・・」

「まあいいわ。そういえばあたしもちゃんとした自己紹介あんたにしてなかったわね。中国の代表候補性、凰鈴音よ。鈴でいいわ。改めてよろしくね。」

「じゃあ次は俺だな。一組の織斑一夏だ。一夏でいいぜ。名字で分かると思うけどあの織斑千冬とは姉弟だ。よろしくな。」

「同じく一組の篠ノ乃箒だ。箒でいい。よろしく。」

「イギリス代表候補性のセシリア・オルコットですわ。呼び方はセシリアで結構、一夏さんと同じ一組ですわ。以後お見知りおきを。」

「あはは、なんだかみんな楽しそうな人だなあ。まあよろしくな。」

「さつてと、自己紹介も終わりにして、さつさとお昼食べちゃいましょ。もちろんあたしはラーメン。」

「またそれが。俺は日替わりランチだな。箒とセシリアは？」

「私は焼き魚定食だ。」

「わたくしはパスタですわ。」

「太智は？」

「え？俺はそうだなあ・・・うん・・・」

「さつさと決めなさいよっ！！後ろがつかえてんでしょっが！」

「うわあ！ごっ、ごめん・・・初めてだから勝手がわからなくて・・・じゃあ、カツ丼で。」

「初めからそうしなさいよ。ったく・・・」

二分後、全員注文の品を受け取り、やっとのことで席を見つけた頃。

「おっ、やっと席が見つかった。みんな、座ろうぜ。」

「ふう、やっと見つかりましたわ。」

「ちょっと出遅れたのがひびいたわね。」

ぞろぞろと各自イスに座り、太智も腰を下ろしたとき、

「井上君、隣いいかな？」

そう言ったのは二組の女子たちだった。

「うん、いいよ。」

(ええっと、手前から明るい感じの子が荒木さんで、スポーツの出来そうな子が松下さん、奥の小さい子が橋本さんだったかな?)

そう言つと後ろの二人の女子が小さくガッツポーズをした。

「やった！ありがとうっ！」

こうして一夏たち五人と太智と一夏目当ての(主に太智狙い。同じクラスだから。)女子三人組の昼食会が始まった。

「そういえば鈴は中国出身らしいけど、もしかして中華料理とかって作れたりする？」

「うん、一通りはできるわよ。」

「あ、それ俺も気になってた。鈴、あれから上達したのか？」

「ふふん・・・あの時とは比べものにならないくらい上手くなってるわよ。」

「へえ、そいつは楽しみだな。近いうち食わせてくれよ。」

「う、うん」

その時鈴の顔が一瞬だけ赤く蒸気したのを一夏と太智は思い切り見逃した。

「ねえ、俺も鈴の料理を食べたいな。いいかな？」

「もちろんいいわよ。」

クイクイ

すると太智の制服の裾が引っ張られた。

「もう井上君、せっかく一緒に食べてるんだからお話でもしようよ。」

「う、うん。そうだね。」

太智はさりげなく一夏や箒たちにヘルプの視線を送った。しかし箒たちはさらっと見て見ぬするフリをし、一夏は温かい眼差しを送ってきた。

(俺もこの前同じような状況になったからなあ・・・)

一夏は遠い目をしてしみじみと思った。

「そういえば井上君って好きな子とかいるの?」

グフツ　　危うく吹き出しそうになる太智。

「い、いないよ。」

「へえ、じゃあ好きなタイプとかは?」

「うん、わかりやすく言うと、高飛車なお姫様みたいな子がいいな。なんかそばで支えてあげたいっていうか。そうだなあ、例えばそこにいるセシリアとか鈴結構タイプだよ。」

ブッフオオオオオオオ!!!　　セシリアと鈴は盛大に水を吹き出した。

「ゲホツゴホツ・・・い、いきなり何を言うのよアンタはっ!」

「ゴホツ、そ、そうですね!!時と場所を考えてくださいまし!」

「井上君・・・さり気に大胆なことを言うのね・・・」

「そうかな?下手にごまかすよりはマシかなって思うんだよね。」

「ふうん、井上君は尽くすタイプなんだね。じゃあ私たちはどう思う？」

「とっても素敵だと思うよ。下手をしたら惚れちゃいそうかもね。」

「もうっ井上君ってばお世辞が上手だね！」

「気に入ってもらえたようで何よりだよ。」

すると隣の鈴に思い切り脇腹をつねられた。

「いててて！何すんのさ鈴！」

「アンタさつきもセシリアが言ったように時と場所を考えてって言うてんのよー！」

「そうかな？」

「そうよー！」

その時ちょうどタイミングを見計らったかのように予冷のベルが鳴った。

「お、もう昼休みが終わったのか。皆、早く戻ろっぜ。」

「井上君、早く戻ろっよ。」

「うん、ちょっと待って。」

そう言って一夏をきっかけに一行は学食を後にした。

「なあ太智。」

「ん？なに一夏？」

「デリカシーがないと女子に嫌われるぞ。」

（お前が言うな。）

篝と鈴とセシリアは同時に心の中でツッコんだ。

.....

数十分後 学園のグラウンドにて

「今日の午後の授業では一組と二組合同のISの実習訓練をする！
！全員ISスーツをちゃんと着ているようだな。ん？なんだ、井上。」

「あのお、俺のISスーツはまだ届いてないんでしょうか？」

「ああ、その件なら、ほね。この前お前が着ていたISスーツを修

理したやつだ。今から五分だけ時間をやる。さつさと着替えてこい。」

「はいつ。」

太智はスーツを受け取ると猛ダッシュで更衣室へ向かって走り出した。因みに一秒でも遅ければ千冬の出席簿が火を噴くので必死になるのも無理はない。

「では先に織斑、オルコット、凰、ISを展開し、上空へ飛翔しそのまま待機しろ。」

「「「はい。」」」

鈴とセシリアは即座にISを展開させた。

「どうした織斑、さつさとISを展開させる。他の奴は一秒もしないうちに展開し終えてるぞ。」

「ちょっと待ってください。もう少し・・・」

右手のガントレットを左手で握り、意識を集中させる。

(来いっ！白式！)

スーツと一夏を光が包み、次の瞬間にはISをまとった姿になっていた。

「よし、三人ともさつき言った通りにしろ。」

「「「はい。」」」

三機のISは上空200メートル程まで上昇し、そこでピタリと止まった。

「よし、そろそろあいつも来る頃だな。」

千冬がグラウンドの端を見やると、全身真っ黒のISスーツを身に纏った太智が走ってきた。

「はあ、はあ、すみません遅くなっちゃって。」

「いや、時間内に来たので謝る必要はない。では井上、ISを展開させる。」

「分かりました！」

「え？井上君って専用機持ちだったの？」

「代表候補性でもないのに専用機持ちだなんて、織斑君と一緒にだね。ていうかあのISスーツすごく暑そう・・・」

「ああ、これはね、プラグモデルって言って、オーダーメイドで作ってもらったんだよ。」

太智のISスーツはプラグモデルと言い、一夏のそれと比べると肌の露出部分が一切ない。顔以外はすべて黒のスーツで覆い尽くされ、ところどころに精密機器部分と思わしき銀の金属部分が顔をのぞかせている。そして太智は一夏と違い、無理やりISに乗るかたちなので、ISスーツも大きくより機械化している。

「いつまで喋っている！さっさとやれ！」

「はいっ！」

そういつと太智はネックレスのプレートに軽く触れて瞬時にISを展開させた。

「ほう、意外に展開時間が早いな。」

「ありがとうございます。」

(ここに来る前は伊達に変な奴らから逃げ回ってきたわけじゃないしな。一番ひどかった時は用を足してる時に襲ってきたからなあ・
・早着替えは俺の特技なんだよな。)

『CREAVEの起動を確認、以下のOSを同時に起動させます。』

無機質な女性の声流れってくる。太智はこの声に何故かなんとなくむず痒くなってしまう。

(この声を聞くとなんかわくわくするんだよな・・やっぱ少年はメカが好きってか。)

『General

Unilateral

Neuro-Link

Dispersive

Autonomic

Maneuver

の起動を確認、以後の操作権限をパイロットに譲渡します。』

全身装甲フルスキンの機体が現れる。しかし・

「なんだか、地味な色だね・・・」

「うん、ちょっとがっかりかも。」

「まあ見てなよ。面白いことになるから。」

(フェイズシフト装甲機動・・・)

意識を集中させると、機械特有の駆動音とともに全身の装甲が色づいていく。

シユアアアン・・・

そこにはさつきまでの地味なモノトーンカラーではなく、緑と白を基調としたISに変わった。

「わあ、すごい！きれーだね！」

「はは、ありがとう。織斑先生、次の指示を。」

「うむ、では織斑たちのところまで上昇、そこまで来たら次の指示を出す。」

「了解。」

そういつと太智は機体を急上昇させ、一夏たちのもとまで近づいた。

「太智のISって・・・あ！お前ってこの前学園に墜落してきた奴か！！」

「え？今頃気づいたの？まあ、そうだけど」

「しかしお前のISって見たことのない感じだな。」

「まあね、まあ詳しくは追々話すよ。」

その時千冬が通信回線を通して話しかけてきた。

「それでは三人とも急降下、急停止をしてもらおう。では始め！」

「それでは一夏さん、太智さん、お先に失礼いたしますわ。」

最初にセシリアが、降りて行き、見事に急停止をした。

（上手いなあ、セシリアは。俺にもできるかな？）

（噂には聞いてたけど、伊達に代表候補生やってるわけじゃないか。）

「二人とも行かないのなら先に行くわよ。」

「お、おう。」

「うっ・うん。」

続いて鈴も急降下していき、急停止した。

「よし、俺たちも行くか、じゃあ俺は先に行くぜ。」

「頑張れよ一夏。」

そうして一夏は急降下していき、急停止を、

(一夏結構スピード出てるな、すごいっ・あっ・っ)

せずに地面へ思い切り正面衝突した。

(うわあ、痛そうっ・っ)

「何をしている井上!!!早く降りて来んか!」

「は、はい!」

そう言っつて太智はスラスターを吹かして急降下していったが・・・

ピタッ

何と太智は地上15メートルのところで停止した。

「あっ・っ・っ・っ。」

「なんだその腑抜けた操縦は!お前は腰抜けか!」

「プククク・・・こ、腰抜けって、クスクス・・・」

「おい鈴、笑うなよ。」

嘲笑する鈴に対して一夏が釘を刺す。

「はあ・・・まあいい、お前は放課後に訓練でもしておけ。」

「分かりました。」

こうしてISの実習は終わった。

放課後 一組にて。

「あはははっ！！腰抜けだって！あはは！」

「わ、笑うな！」

「太智さん、チキンという言葉を知っていますか？あ、でも食べ物の方ではありませんよ。クスクスッ。」

「お前ら、いい加減にしろよ。誰にだって苦手なことくらいあるだろ。」

「い、一夏……。」

「でも、15メートルも手前で止まることなんてあるの？フフツツ・・
やば、ツボツたっつ・・ククツ・・。」

「お前ら、そんなに俺が腰抜けに見えるなら模擬戦をしようじゃないか!!」

「フフン・・いいわよ。ハンデはどうする？ビビりさん？」

「そんなものはいらねえ、二人まとめてかかって来い！」

「あら、ずいぶんとなめられたものですわね。私たちは代表候補生ですよ。本当にそれでよろしくて？」

「おい太智・・それは止めといた方がいいんじゃないか？」

「いや、こいつらには一泡吹かせてやる！」

「ほう、威勢だけはいいようだな井上。」

一体どこから湧いてきたのか一夏の背後に千冬と二組の担任が立っていた。

「うわあっ出たあ!!」

「人を化け物のように言うな。」

バシンッ!!

このタイミングでの一夏への出席簿アタック。

その時うしろにいた二組の担任が太智に一つのキーを渡した。

「井上君、あなたの部屋が決まったわ。そこの織斑君と相部屋よ。これキーね。」

それだけ言うと、担任の先生は教室を出て行った。

「話を戻すが、お前ら模擬戦をするのだな？」

「はい、そうですけど。」

「よし、では来週の月曜日の放課後、第三アリーナで織斑と井上、オルコットと凰の二対二で模擬戦をしよう。」

「ええっ！？なんで俺まで！！？」

「さすがに二対一で勝てるわけがないだろう。異論はないな？では解散。」

そう言って千冬は教室を出て行った。

「太智、とりあえず帰ろう。ほら二人も。」

「え、ええ。」

「なんだかきつかけが自分たちとはいえ、あまりにも唐突に決まっ
てしまいましたわ……。」

「そ、そうね。」

その後三人も教室をそそくさと出て行った。

因みに太智は寮に帰る途中でテニスコートに寄り、ソフトテニス部に入部届を出した。

第三話 挑戦状（後書き）

太智のISスーツはエヴァのプラグスーツをイメージしてるんですが、またすぐに新しいスーツに変わります・・・
後太智のISはSEED初期のGAT Xナンバーシリーズの機体をイメージしてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4188y/>

IS インフィニットストラトス invisibility menaces 見えざる脅威

2011年11月22日04時02分発行